

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

県政150周年
加西市健康福祉会館ホール



第200号

題字 出口 草 露
発行者 〒679-5322佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計 〒657-0043神戸市灘区大石東町4-3-1305 福島妙子
振替 01110-5-6903
印刷所 ㈱ 甲南堂印刷



シンポジウム『短歌・俳句・現代詩のあいだ』
歌人・俳人・詩人の立場からの含蓄深い発言が…

文部科学大臣賞
高井 忠明さん (宝塚市)
ジュニア部門兵庫県知事賞
中谷 綾乃さん (神戸第一高等
学校 三年)

ふれあいの祭典「兵庫短歌祭」が、県政150周年記念行事の一環として12月8日(土)午後1時から、加西市健康福祉会館ホールで開催された。主催団体の一つである加西市による周到な準備と当日運営の協力もあり、つつがなく盛大に行われた。朝から快晴。南は淡路、北は養父・豊岡など県内各地、県外からの参加者で、会場は熱気に満ちていた。総司会会は芝本政宣、加藤直美両氏。オープニングは加西市ふるさと部の藤田氏の司会により「加西市こども狂言塾」の塾生が演じる狂言「根日女」。市に現存する(玉岡古墳)の主根日女と二人の王子の恋の伝説に基づき狂言に会場からは笑いや拍手がおこった。



西村加西市長より受賞の高井忠明氏

賞者は、兵庫県知事賞中谷綾乃さん他10名。入選5名。佳作41名。受賞者の氏名が読み上げられると舞台正面にスライドでその短歌が映し出され、賞状と副賞が一人ずつ授与された。

総評は桂保子氏。「一般、ジュニア共に良い作品に恵まれた、ジュニア部門には初々しい相聞歌があったが、一般の部には歌の花である相聞が少なかつたのが残念」。

今年を受賞作品一首一首の展示コーナーが会場外のホワイエに設けられ、丹念に見入る人や撮影するご家族や友人で賑わっていた。また、一般の部の希望者のために作品批評コーナーを特設。新屋修一・山中洋子・桂保子各氏が担当。次に、シンポジウムが始まる。パネリストは高橋睦郎氏(詩人)、小川軽舟氏(俳人)、山下泉氏(歌人)、コーディネーターは林和清氏(歌人)。テーマは「短歌・俳句・現代詩



「根日女」を演じる塾生達

のあいだ」。

それぞれの立場から、選んだジャンルの中で詩をどのように考え、どのように創ろうとしているのかなど、自作の紹介を含めて熱のこもった含蓄深い発言が相次いだ。有意義な2時間であった。

歌人クラブ副代表生田よしえ氏の閉会の辞、午後4時30分終了。参加者332名。

今回、特にご尽力してくださった加西市議会議長長衣幸利則氏、加西市文化連盟会長山端一男氏、加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課の皆様へ感謝し、御礼申し上げます。

(大西よしこ)



パネリスト・左から高橋睦郎、小川軽舟、山下泉の各氏

シンポジウム

『短歌・俳句・現代詩のあいだ』

パネリスト 高橋睦郎氏(詩人) 小川軽舟氏(俳人)

山下 泉氏(歌人)

コーディネーター 林 和清氏(歌人)

プロフィール

高橋睦郎氏(詩人) 昭和12年福岡県生 短歌・俳句・詩など他分野にわたる表現者。紫綬褒章受章・文化功労者

小川軽舟氏(俳人) 昭和36年千葉県生 俳誌『鷹』編集長

山下 泉氏(歌人) 昭和30年大阪府生 短歌結社『塔』所属

林 和清氏(歌人) 昭和37年京都府生 歌誌『玲瓏』選者

表現者としての立ち位置

林 このシンポジウムに際し、一つの雑誌に匹敵する充実した資料が配られたことに驚きと感謝の念を禁じ得ません。この上はコーディネーターとしてパネリストの皆様に存分にお話ししていただくお役目を果たしたいと存じます。まずは、自己紹介を兼ね、表現者としての立ち位置、詩についてどんな考え方をし、どんな作品を創ろうとされているのかについて、お話ししたいと思います。

小川 毎日のように歩く見慣れた街並みに、ある日ぽつかりと更地ができていた。昨日までここに何があったのか思い出せないといったことがあります。とはいえ、まったく忘れていくわけではな

く、何かのきっかけがあれば思い出せるはず。そのきっかけになる言葉が俳句なのだと考えます。俳句とは記憶の抽斗を開ける鍵のようなもの。しかも俳句が引き出す情景は作者が頭に思い浮かべていた情景に限定されない。たつた五七五、十七音しかない俳句が豊かな内容を持ち得るのは、このように読者が脳裏に収めている情景を思い出すという過程を内包しているからです。

山下 詩(ボエジー)というものは、永遠にふれる体験であり、死の側からのまなざしによつて結像するものと思つていきます。短歌や俳句・現代詩はそれぞれに固有の異なった韻と音数律による創作のメカニズムをもつており。それぞれの作品の核にこの詩を分有しています。私の場合は、短歌の中に詩がどのような形で現れるのかを常に意識しています。実際に短歌に関わつたのは、大学に入つてから。リルケの詩に出会うとともに、その詩の翻訳者・研究者そして歌人であった高安国世に出会つてからです。

高橋 私は中学一年の頃から「投稿少年」の常として、いろいろなジャンルの作品を同時に作つてきて、それが今も続いています。そのため、立ち位置を問われると困惑します。ただ、書きたいという衝動が起こつた時、すでにジャンルを選んでいるようです。俳句にしようか短歌にしようかと、形式に迷つたことはありません。

作品に籠めた想い 自作自注

林 それでは次に、皆様の最近作、あ

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
茅花短歌会	ふれあい交流館(稲美町)	第2水曜、午前9時	079(492)1766 前田 昭子
てのひら	NPO法人てのひら(高砂市)	第1土曜、午後	079(442)2476 石原 智秋
白珠加東支社	滝野公民館(加東市)	第2水曜、午前	0795(48)3679 片山 洋子
コスモス加西	中央公民館(加西市)	第2木曜、午後1時	0790(42)0415 藤岡 成子
	アスティア(加西市)	第2金曜、午後1時	
小野短歌会	コミュニティセンターおの(小野市)	第1日曜、午後	090(3895)5022 芝本 政宣
下東条短歌教室	コミュニティセンター下東条(小野市)	第4日曜、午後	0794(67)0750 山本 満代

るいは面目躍如たる作品をご披露いただき、創作意図といったものをお話してください。

※紙面の都合で俳句・短歌はそれぞれ二作品、現代詩は一篇のみ紹介

【小川軽舟氏の俳句】

・平凡な言葉かがやくはこべかな
私は俳句において難しい言葉ではなく、なるべく平凡な言葉を輝かせてあげたいと思っています。そんなささやかな思いと、春先の寒さの中で咲くこべの花を取り合せた作品です。私の俳句づくりのスタンスですね。

・死ぬときは箸置くやうに草の花
私の代表句の一つと言われ、自分でも気に入っている作品です。死ぬときは箸を置いて「ごちそうさま」と言うように、自分の人生を終わりたいという思いを籠めた作品です。「草の花」を持ってきたのは、薔薇などの立派な花でなく、名もなき草の花のような人生を愛おしみたいからです。実はこの句は四十代の作品でしたが、この自覚は死の間近では遅い、それまでの日々を真面目に生きなければならぬと、自分を律する俳句です。

林 小川さんの誠実なお人柄、透明感のある人間性を如実に見る俳句ですね

【山下 泉氏の短歌】

・その秋は隣の扉の中にあり堅くしまりし能面として
秋の不思議な手触り、匂いといったものを歌にしたいと常々思っています。ふと能面は死者の顔であることに

気づきまして、その連想として秋の底には死の気配がこもっているのではという詩想に囚われたのです。それをこういう形に表現してみました。
・かたかたと夕べのひかり揺すりつつ
木馬は来たり夢の方から
木馬は古来いろいろなものを象徴するものとして歌われてきています。私

の場合、秋の夕暮れのくつきりとした、しかしさびしい光の中で光自体を揺らして何かがやつてくる、その何かの存在感、それを象徴するものとして木馬が感じられたのです。その木馬は「夢の方から」来たと歌っています。ここには「本当の覚醒はむしろ夢の底に在る」という直観が働いたのだと思っています。

林 山下さんは現代でもっとも知的なポエジーのある歌をつくる作者として評価されています。これらの作品もまさにそんなポエジーがあります。

【高橋睦郎氏の現代詩】

高橋 日本 の詩の歴史の中で大切な先達二十四人を掲げる「連載詩・深きより」を某雑誌に連載していますが、その中から柿本人麻呂の一篇『私がゐるの』を朗読します。

石見國鴨山か 河内國石川か 別の何處か と／私の終の臥床 奥津城 どころを捜しあぐねる人よ／無駄なこと 私の記憶は それらの何處にもない／私の仕事は つまるところ 私の足跡を消すこと／うつそみの私を消すことこそが 歌を立たせること／氏が何で 産土が 何方かも

尋ねて何の益があらう／私がゐるのほただ 私のうたつた 歌のその内／歌を書きとめた文字の並びの その中に のみ／私は稚く うたふことを覚え 書くことを習つた／歌と文字とは 私において つひに一つに／私は うたつた歌を 文字で書きしるした／あるいは 文字で書くことで 歌をうたつた／文字で歌をうたつた たぶん 私は最初の者／むしろ 歌が 文字が 私をそこに導いた／私はうたひつづけた 私 は書きつづけた／私のためではない 歌のため 文字のため／うたふこと 書くことが 私の生きること／言葉のヒンガシノノに 文字の炎が立つ／そのとき 私はヒンガシノノに 生きてゐた／こののちも 炎の中に 生きつづけよう／依羅娘も 泣血哀慟の妻も みんな幻

高橋 この詩は柿本人麻呂を題材にしたものではなく、私に憑依した彼自身が詠っているものです。この時、私は巫となつています。

林 見事な朗読に聞き惚れました。日本の歌を自由に文字で記せるようになったのは人麻呂の功績と言われていますが、この辺りまで下りたつていらつしやるのですね。

高橋 付言すれば、表現者としての僕自身の思いでもあります。結局、僕なんてどこにもいなくて、書いたものの中にしかない。さらに言えば、いるのかいないのか、後は野となれ山となれですね。

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
東条短歌会	東条公民館(加東市)	第2日曜、午後	0794(62)2846 松尾 鹿次
美加志保巨勢教室	巨勢教室(加東市東古瀬)	第3日曜、午後	
コスモス葛の花	八千代プラザ(多可町八千代区)	第2水曜、午後1時	0795(37)0680 岸本しげ子
姫路水饗歌会	姫路市民会館 指導 小畑 庸子	第3土曜、午後1時	079(232)4003 生田よしえ
香寺短歌会	姫路市香寺公民館	第2水曜、午後1時	
コスモス藍の会	姫路市民会館	第2土曜、午後1時	079(448)0895 久米川孝子
コスモス姫路	姫路市民会館	第3日曜、午後1時	079(269)0513 飯田 進



明快にコーディネートする林和清氏

【林和清氏の短歌】

・冬虹を仰ぎつつ空に懸けてあるいま
までに見たいいくつもの虹
私の歌づくりの中心テーマはこういう
ものです。冬の虹を見たら、今まで
に見た虹が全部重なって見える、現在
で見ているものに過去にみたものが全部
かさなっているんだなあという感覚を
捉えようと思いました。

・逆さ水だと思ひつつ湯を足してゆく
命よみがへるほどの温度に
逆さ水とは死者を洗い清める湯灌の
時の水のことです。冷たい水に熱い湯
を注いでぬるま湯にするものであり、
普通のやり方とは逆なのです。お風
呂に入り、温度調節している時、この
ことに気づいたわけです。

他ジャンルに挑戦してみても
そこに見えてくるもの

林 皆様にあえて他のジャンル・形式
の作品を創っていただきました。他の
ジャンルで創った作品に作者の本質が
見えてくるのではと思うのです。

ちなみに、今回のシンポジウムの打
ち合わせの際、高橋さんは「現代の作者

達は、なぜ他のジャンルの表現形式に
挑戦しようとするのか。そのことで
得られる大きな富を活用しないのか」と
語っておられました。
※作品個々の紹介と鑑賞を割愛し、議
論の要点のみを掲載。

●俳人が短歌に戸惑うこと

三十一音で物考えることが不慣れ
で途方にくれた。十一月プールの底に
蜂歩み十二月まで曆古りゆく」とい
う作品は、実は十一月プールの底に蜂
あゆむ」という俳句を引き延ばしたも
のです。高橋さんは「俳句作者が短歌
を創ると、ほぼ三句切れになり、下句
は連句のようだ」と指摘されていまし
た。(小川氏)

●俳句の形でもなぜか短歌

山下さんの俳句「干し鬼頭魚よろず
屋の窓に吊られいき」について。俳句
は現在、眼前にあるものを写生するも
のですが、この句は「吊られいき」と
眼前にないものとして、ポエジーが立
ち上がってくる感じがします。新鮮です
が、俳句ではない。(小川氏)

同じく「流水に寄りゆく魚影くれぐ
れと」は「くれぐれと」と言った途端
に短歌になっている。(高橋氏)

●高橋さんは言葉の歌人

高橋さんの詩は平易な口語ですが、
歌となると、文語どころか古代語にな
り、もはや言葉の世界です。(林氏)

●短歌と俳句の時間性の違い

山本健吉の有名なテーゼに「極言す
れば俳句は音数の長さを持たぬ詩なの
だ。三十一音が十七音になるまでの間
に時間性の抹殺という暴力的飛躍が遂
行されたのだ」がある。つまり、俳句
は調べを奏でる時間がない詩であり、
一瞬にしてひとかたまりに出来るもの。
これに対して短歌は三十一音が奏でる
時間を読者にどう伝えられるかを意識
しながら、巧みに助詞を活かし創らな
ければならない。(高橋氏)

俳句は短いけれど一つの全体であり、
大きな世界を描ける。短歌はなにかの
一部、前後の時間を背景にして成り立
っている。言い悪いは別にして。(高橋
氏)

☆兵庫県歌人クラブ新年懇親会のご案内☆

平成31年1月21日(月)ポートピアホテル29F「聚景園」にて
開催いたします。
11:30~14:30 078-303-5202
海を見晴らす高層階の部屋で語り、新年を祝いましょう。
皆さまふるってご参加ください。
三宮バスターミナル8番乗り場よりシャトルバス、または、三宮
駅よりポートライナー約10分「市民広場」下車すぐ。
会費7,500円(料理・フリードリンク)
問い合わせ: 廣庭由利子 090-5254-5236

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
塔 姫 路 歌 会	城南公民館(姫路市)	第2日曜、午後1時	0791(62)3538 藤原 明朗
ポ ト ナ ム 姫 路	姫路市民会館	第3月曜	079(266)3603 糴川 範子
文 学 圏 社	姫路花の北市民広場(姫路市)	月初めの午後	078(961)5676 浮田 伸子
揖 西 短 歌 会	揖西公民館(たつの市)	第4日曜、午前10時	0791(66)2186 菅野 仁孜
「白圭」龍野歌会	たつの市生きがいセンター	第4月曜、午前10時	0791(63)4734 内海 永子
赤 穂 短 歌 の 会	赤穂市民会館	第4土曜、午後1時半	0791(48)0137 尼子 勝義
佐 用 姫 短 歌 会	西山会館(佐用町)	第2火曜、午後1時半	0790(82)3019 衣笠 邦恵

華やかなりし
歌人クラブの幕明け

岸野 和夫



県歌人クラブが結成されて既に六十一年。九十五歳になった私には、ついでこの間に思いだされる。手許の発会当時の会員名簿は、戦後の物資不足の折柄、横型A5版ザラ紙で作られ、神戸、阪神地区を中心に、淡路東播、西播、中播、播但、但馬と県内全域に及ぶ総勢四七四名であった。現在当時の生存者はコスモスの水野美子氏と、その頃青虹所属の私くらいになつてしまったように思う。

正確で
読み易くするには

土居 正



阪神淡路大震災で当時の資料が散逸何時の頃から会報の編集に携わったかは定かではありませんが、多分米口實氏が代表になられた時から石橋妙子氏の代表の頃までかと思えます。ただ歌人クラブ創設五十周年のときには幹事として編集をしており、記念行事の開催について提案させていただいた記憶があります。会報の編集については私自身いろいろ考えました。読み易くするためのキ

春季短歌祭作品集には、三九四名が出詠。その他に、県歌人クラブ規約選者詠草三十一首も収められている。

県歌人クラブの一年間の歩みによると、年間行事として短歌祭は春秋二回短歌教室は各地で八回、巡回講座は各地を回り、六回と、相当精力的に、短歌の振興に努力しておられたことが記されている。

最近では学生を中心に、後進育成に努めておられることは、何より心強い限りと思う。

一つ気掛かりなことは、年刊歌集の出詠者が、ここ数年激減していることである。以前に増し、活気ある年刊歌集を祈念する。

ヤッチフレズ、レイアウトをどうするか。そして客観的にクラブの出来事を正確に伝え、かつ会員の皆さんが興味をもって読んでくださるにはどういう内容にするか。執筆依頼も幹事に偏らないように。また高齢に伴う会員の減少を食い止めるために、会員の名前をできるだけ多く載せる工夫など。気を使いましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。

今と違って当時は植字活版印刷であり、校正を繰り返しながら出来上がるまで一日中印刷屋に張り付いて、出来上がった会報を抱え持った感触は今でも忘れられません。

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
銀の道短歌会	生野メインホール(朝来市)	第3火曜、午後1時半	079(672)2334 中島眞喜子
さくら木短歌会	枚田岡会館(朝来市)	第3日曜、午後1時半	
潮音神戸歌会	神戸市勤労会館	第1土曜、午後1時	090(6738)3744 石橋 妙子
花鏡木曜教室	東灘区民センター	第2木曜、午後1時	
花潮会		第3金曜、午後1時	
KCC舞子短歌教室	KCC舞子(垂水区)	第3水曜、午後1時	078(371)0239 中川 昭
海市短歌会	神戸市婦人会館(中央区)	第4日曜、午後1時	
神戸白珠の会	六甲道勤労市民センター	第2水曜、午後1時	078(881)1578 小谷 博泰
波濤神戸	保田ひで宅(長田区)	毎月中旬	078(612)9294 保田 ひで
ポトナム短歌会(須磨歌会)	兵庫勤労市民センター(兵庫駅前)	第4日曜、午後1時半	079(557)0679 中西 健治
万華鏡	神戸市勤労会館	第4月曜、午後1時半	078(242)1493 黒崎由起子
未来・神戸アロード歌会	神戸市勤労会館	第1火曜、午後1時	078(792)9057 河村 公美
檀の会	神戸市勤労会館	2月、10月、第2土曜、午後1時	078(991)3073 尾崎まゆみ
青山短歌グループ	立花公民館(尼崎市)	第2木曜、午後1時	06(6429)5158 たなかみち
林間短歌会	中央公民館(尼崎市)	第2金曜、午後1時	06(6482)2065 登島 政利

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭 入賞作品評

文部科学大臣賞

高井 忠明 (宝塚市)

善きことも哀しきことも聞き終えて
文箱に眠る父の補聴器

選考委員の大半の選を得た。票が多ければいいというものでもないが、この作は自然体の実感に無理なく添ってくる。「文箱に眠る父」「(その)父の補聴器」と、補聴器を詠いながら、亡き父を偲ぶ心の調べが「個」を離れた普遍的の余韻を生んでいるのである。補聴器という「もの」が単に器械的、機能的にあるのではなく、その担っている原質にせまり、上句がそれを呼び込んでいる。「聞き終えて」の擬人化表現も無理が無く、よく働いている。
(安藤直彦)

兵庫県知事賞

三村 時枝 (西脇市)

反抗期に壊ししノブを取り換えて子は
は帰りたり何も言わずに

一つの事実を、格別に言葉の修飾もなく簡潔に言っただけ。だがその三十一字、一行の中に、相当の歳月の経過と親子のドラマを、親と子双方の心理まで覗えるほどに読む者に伝える一首である。散文ならばかなりの紙数を費やすであろう。この物語の象徴が「ノブ」という、小さな具象である。玄関の扉か室内のかわからないが、ある

日実家に帰って、黙ってこの小さな作業を行って去った子とそれを見送った親の姿が彷彿として余韻を残す。
(藤井幸子)

兵庫県議会議長賞

時里 直子 (加西市)

くしゃくしゃに丸めしままの便箋に
籠めし本音が這い出しそう

せつかく書いたけれど、丸めてしまった。時にこんなことをする人もいるだろう。この歌の場合、下の句を読めば理由が判明するのである。
丸めたままの便箋が、やがてほどけ始める。その動きに眼を止め、下の句に「籠めし本音が這い出しそう」と感受できたところ、独自の眼と心がある。思わず書いた本音が、矢張り言わない方がいいかも、と迷う心情は、さりと歌い放ったかのような、作品の中にこめられている。
(田岡弘子)

兵庫県教育委員会賞

青田 綾子 (神崎郡)

細き指しなやかに手話を交わしおり
五月の風に詩をかくように

上句は、情景描写。その情景を下句で直喩表現した。題材としては珍しくないが、「五月の風に詩をかくように」の比喩が個性的で爽やかである。美しい少女たちの若々しさへの作者の羨望

とも思えるものが、下句の表現となった。この比喩にあたらしい感性を感じる。「風が詩をかく」のではなく、指が「風に詩をかく」と捉えたところが斬新でよい。直喩でなく、暗喩の一首とした場合ほどのように変化するだろうか。興味深い。
(生田よしこ)

(公財) 兵庫県芸術文化協会賞

岡本 光代 (六粟市)

老ゆるとはとどまらぬこと今年また
夫のズボンの丈をつづめる

毎年のように夫のズボンの丈をつづめるという具体的な行為の中に、夫の老いを捉えた感性の豊かさを感じます。仏教では、「生老病死」を四苦とし、人間の避けることのできない苦悩と説いています。いずれも自分の思いどおりにはならない現実です。それならば老いを苦ととらえず、老いの中に生きることの深まりを見つめたいものです。
なお、結句「つづめる(約める)」は、短くする、小さくするの意で、文語の終止形は「つづむ(約む)」。(尼子勝義)

加西市長賞

木下加代子 (尼崎市)

身を焦がす程の生き方まだ知らず秋
刀魚焼きおり秋くれればまた

身を焦がす程の情熱的な生き方をまだ知らない自分であると過ぎて来た日々の感慨を上句で述べ、下の句では現在の生活をリアルに詠まれている。一見つまらないと思ってしまうような日常の描写であるが、決してそうではないと気付かされる。結句の「秋くれ



左から岡本光代、木下加代子の各氏

加西市議会議長賞

田中 養代 (小野市)

長生きの秘訣はないと笑ひつつ母は
小粋にスカーフ結ぶ

いいですね、このように歳を重ねていらつしやるお母さん。毎日の生活態度そのものが取りも直さず生きゆく秘訣なのでしょうね。ほのぼのとして示唆に富む一首となりました。「小粋に」この言葉の選択に非凡なものを感じます。益益ふえてゆく高齢者社会に明るい光を注いでくれた一首です。短歌の表現も文語、口語、その混合と多様化してきましたが、この歌のように口を衝いて出てきた思いをごく自然に表現

して秀歌となるよき例と致します。

(船橋貞子)

加西市教育委員会賞

前田 美樹 (加古川市)

・切り分けたカステラのような建物のひとつの中のひとつの我が家
マンション等にお住まいの方だろう。上空から街を俯瞰しているような視線を感じる。建ち並ぶ建物から一つの建物へ、その建物の多くの戸から一つの戸へとスムーズに視線が移ってゆく。同時に、街からコミュニティ、コミュニティから家族へと生活の単位が絞られてゆく。これは、無機物である建物をカステラという柔らかく温かみのある有機物に喩えた効果だろう。ささやかではあるが、かけがえのない家族への思いが伝わってくる。

(新屋修一)



前田美樹氏

神戸新聞社賞

芦田 礼子 (姫路市)

・遮断棒の向こうをゆっくり過ぎてゆく夏の終りの回送電車
暑さのやや衰えはじめた夏の終りのけだるさを、回送されてゆく電車の動きでうまく表現している。電車は、車庫へと回送されて行くのか、単に車線

を変更するために移動しているのかは解らないが、回送電車という物体のみを詠んで、自らのもつ「けだるさ」をも表し成功している。電車を列車とすると時間的な長さが出る。
「ゆっくり」は一首を少し間のびさせたか。「音なく」などで距離感を出すのも、一つの方法であろう。(小畑庸子)

加西市文化連盟会長賞

垣内 啓子 (加西市)

・水面へ落ちるもみじ葉それぞれに紅のおもさの水紋えがく
秋の景色を素直に描写した好感の持てる一首である。池の畔にはらはらと葉を零す一本の楓。「紅のおもさ」という表現で一気に紅いもみじの景が浮かび、歌に艶が出た。静かな水面に落ちる紅葉に、そこはかとなく滅びの美しさと感じる。形容詞を用いず、ここまで情緒を出したのは美事である。ただ、水面と水紋、似た音が重なるので水面と和語にするか、「水」を二度使わず「水面」を他の言葉にするか、工夫があってもよかつたかと思う。

(廣庭由利子)

兵庫短歌祭加西市実行委員会賞

釜地 順子 (相生市)

・やる気の「や」やとと生れ来て朝六時野良を着たり三連夜過ぎて
吊いをした人との関係は分かりませんが、ごく近い人の吊いの後は、放心状態が続き容易に普段の生活に戻れない。三連夜という時間を経てやっと野良を着る気持ちに素直に同感する。

上の句、少し間延び感だが、作者の感情の変化をストリートに表現し読者の共感を得られたと思う。「野良を着たり」で、やとと日常の暮らしに復帰できた事を作者自身が確認している。大事な捉え方だと感心し安堵もした。
(来田 務)

兵庫県歌人クラブ賞

藤本るみ子 (多可郡)

・雨音を訳せる傘がほしいねとひと駅歩きし梅雨の初恋
短歌を詠む人なら大抵一度や二度初恋を主題に詠んだ経験があるだろう。従って初恋の歌は古今数多くあると思う。それを今改めて詠むならどのような背景でどこに焦点を当てるかが極めて重要になってくる。

この一首の背景は梅雨の季節であり焦点は雨音である。雨音をリズムとして捉える発想はよくあるが、言葉としてというのは珍しい。若い二人が一つの傘に一駅歩く間、あるいは声に出せなかつた言葉を雨音に託したのである。若い日の寡黙な恋が初々しい。
(内海永子)

入選 (8人)

塩澤 文字 (姫路市)

・国生みの神話伝わる家島群島の四十余島のひとつに暮らす

橋間 時子 (多可郡)

・無表情な少年棋士の指より確信の一手静かに決まる

西橋 美保 (芦屋市)

・少年と少女のあひだを行き交つてと

つげん架かつたあやとりの橋

郡 英子 (加古川市)

・傷つくも癒すもことば ほろほると閑かにひらく木斛の花

桂 日昌志 (加東市)

・骨壺に小石がひとつ音たてて戦死の父が戦後にかへる

政野 哲子 (篠山市)

・我よりも低くなりたる母の肩歩幅合はせて暮参り終ふ

大西 恒祐 (相生市)

・健さんと呼べば振り向く奴がみた階段教室にいい風ぬけて

井上 美鈴 (加東市)

・月の影くつきり浮かぶ露天風呂そつとはして満月のなか

佳作 (13人)

三津野幸代 (神戸市)、瀬川弘子 (姫路市)、後藤記代子 (加西市)、大谷忠子 (宍粟市)、西田弘子 (豊岡市)、藤中光代 (西脇市)、岩浅久美子 (養父市)、武内栄子 (たつの市)、藤本まさよ (加西市)、山内吉加 (伊丹市)、阿部綾子 (たつの市)、吉田千代美 (高砂市)、左藤俊弘 (神戸市)

「受賞しました」

☆第26回なからみ出版賞

『星岸』

平成30年7月6日

岩尾淳子

☆半どんの会文化賞

平成30年7月22日

小林幹也

ジュニア部門入賞入選作品選評

桂 保子

短歌祭の本年度ジュニア部門参加校は中学校二十五校、高等学校十一校、応募総数五七八首でした。それらが放つ柔らかな抒情に魅了されながら拝読しました。学校生活、クラブ活動、家族や友人への思いや淡い恋心などの喜びや葛藤が瑞々しい感性で三十一音に掬い取られていました。選外の作品にも多くの魅力歌がありました。先生方のご指導ありがとうございました。

兵庫県知事賞

神戸第一高等学校
三年 中谷 綾乃

緊張で続かぬ会話合わない目全てはつないだ掌のせい
歌の登場人物は作者ともう一人。この設定の「場」が明瞭で初々しい恋の予感の瞬間を上手くキャッチした作品。「緊張で続かぬ会話」、そして目も合わせられないのだ。読者にも胸の鼓動が聞こえそう。若い日の大切な一瞬がスナップ写真以上に確かに詠い残せた。

兵庫県議会議長賞

神戸市立吉田中学校
二年 東垣 乃愛

墓参り祖父との思い出線香のけむりに乗って私をつつむ
祖父との思い出がモチーフの作品。悲しいことに祖父はもう泉下の人なのだ。花や線香を手向けると流れる線



左から中谷綾乃さん、東垣乃愛さん

香のけむりの中に、祖父の姿や思い出が見える作者。優しい心が見た幻影が美しい。仮名表記の「けむり」や「つつむ」が穏やかな温かさを呼び込んだ。

兵庫県教育委員会賞

兵庫県立農業高等学校
二年 伊藤 優衣

体育の掛け声かける瞬間に牛も声出す農業高校
作者は農業高校生。体育の授業中、掛け声を掛けてランニングだろうか。その時、動物科で飼育している牛のんびりした鳴き声が届いたのだ。応

援か、或いは一緒に参加したいのか。学校で共に暮らしている生き物への視線が温かで、このほのぼの感は秀逸。

(公財) 兵庫県芸術文化協会賞

神戸市立吉田中学校
三年 松井優々子

「がんばれ」と「お疲れさま」の両方に聞こえたような蟬たちの声
熊蟬の声だろうか、「がんばれ」と言つてるように聞こえる。いや、「お疲れさま」と労つてくれてるようにも聞こえる。対極にあるようなフレーズだが、二パターンに聞こえるこの不思議！もう一人の私の声なのだろう。心の揺れをうまく掬って詩が生まれた。

加西市長賞

加西市立北条中学校
二年 田之中梨歩

一匹のインコに教えた一言をいまかいまかと待ち構える我
インコは教える人と人の言葉を真似て発声する。作者は懸命に教え込んで「いまかいまか」と待っている場面。さあ、成功したのかしら。楽しい歌だ。

加西市議会議長賞

三木市立志染中学校
一年 寺口 和希

ねこのびる真夏のろうかひんやりとぼくもいっしょにせのびしてみろ
ユーモア感が魅力の歌だ。「真夏」以外は平仮名、作者の工夫だろう。猫はひんやりした場所を上手く見つける。猫に做つて廊下で僕も「のび」ただ。

加西市教育委員会賞

兵庫県立龍野北高等学校(定時制)
三年 三村 翔翔

夏の夜の少し冷えている放課後の電車はじく音だけ響く
皮膚感覚と聴覚から取材した学校現場からのこの歌、映画のワンシーンのようだ。定時制高校の放課後、夜も少し更けた時間帯の教室の景色が鮮やか。

神戸新聞社賞

兵庫県立佐用高等学校
二年 京山真歩由

食卓に庭からもいだ夏野菜パリティときゅうりジュワツとトマト
「パリティ」そして「ジュワツ」のオノマトペが適切。きゅうりとトマトのそ



左から県立農業高校の森垣岳先生、伊藤優衣さん、齋藤真尋さん

それぞれの質感、食感を上手く表現して
いて、菜園の夏野菜の新鮮さが快い。

加西市文化連盟会長賞

兵庫県立農業高等学校

一年 齋藤 真尋

・きつとそう君の心も今頃は気持ちあ
ふれて川になつてる

初句「きつとそう」の口語五音が軽
やかで印象深い伸びやかな歌。「君の心
も」の(へも)が効いた。君も私と同様
に熱い思いでいるはず…瑞々しい!

兵庫短歌祭加西市実行委員会会長賞

兵庫県立大学附属中学校

一年 岡本 慶

・夏野菜たわわに実る菜園に祖父の笑
顔が輝いている

祖父ご自慢の菜園なのだろう。夏野
菜たちはどれも見事な出来映えなのだ
ろう。「たわわ」の幸福感と「祖父の笑
顔が輝いている」の明るさが魅力。



岡本 慶さん

兵庫県歌人クラブ賞

兵庫県立多可高等学校

一年 今中音乃太

・浴衣着た君の横顔まぶしくて花火よ
り大きい僕の心拍数
花火大会の日、「君」は普段の装いで

はなく浴衣姿でそばに居るのだ。そり
や「横顔まぶし」いでしよう。「心拍
数」の語がよく効いて、歌も眩しい。

入選(5名)

高砂市立竜山中学校

中村 遥希

・おぼけ屋敷大声ひびく笑い声誰だよ
最後足つかんだの

神戸市立神港橋高等学校 岡本 莉音
・しわがない制服に身をつつまれて自
然と私の背筋も伸びる
兵庫県立北条高等学校 横山 友寛
・帰省中お墓に行くと思ひ出す追いか
け続けた大きな背中
兵庫県立北条高等学校 三船 園佳
・休日の昼食つくる祖母の指少女のよ
うにせわしなく動く
兵庫県立多可高等学校 星 実来
・夏海なくしたものは自転車鍵と
はかなく消えた初恋

佳作(41名)

加西市立北条中学校

塚本 萌花

神戸市立神港橋高等学校

川本 嵩子

神戸市立神港橋高等学校

新納 ころ

神戸市立神港橋高等学校

中森 夕貴

神戸市立神港橋高等学校

徳田 唯

神戸市立神港橋高等学校

橋本 愛華

三木市立志染中学校

金井 秀真

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校

北中 里空

香美町立村岡中学校

田邊 怜久

神戸市立小部中学校

黒木 望央

高砂市立竜山中学校

松本 里緒

高砂市立竜山中学校

中岸 麗斗

加西市立北条中学校

山下あすか

加西市立北条中学校

小田 若菜

姫路市立香寺中学校

村木 笑優

加西市立加西中学校

赤坂亜依奈

兵庫県立農業高等学校

門内 綾香

神戸第一高等学校

大野 茅津

兵庫県立大学附属中学校

山脇 愛理

三田市立藍中学校

佐藤 万姫

相生市立矢野川中学校

竹田 朱里

相生市立矢野川中学校

前田 あいか

相生市立加西中学校

奥本 優奈

姫路市立豊富中学校

坪田 想乃

姫路市立豊富中学校

芦田 穂華

姫路市立豊富中学校

谷口 楓真

兵庫県立山崎高等学校

津田 直季

兵庫県立大学附属中学校

古川 実葉子

兵庫県教育大学附属中学校

喬 香琳

神戸市立鷹取中学校

遠藤 ほか

三木市立緑が丘中学校

小山 あかり

三木市立三木中学校

堀田 菜風

多可町立中町中学校

池町 美花

三木市立星陽中学校

桑村 侑

武庫川女子大学附属中学校

糠野 滯那

神戸市立星陵台中学校

安福 愛海

宍粟市立波賀中学校

松本 香音

香美町立香住第一中学校

東 花奈

神戸市立友が丘中学校

長井 玖愛々

三木市立三木東中学校

植田 彩花

兵庫県立播磨農業高等学校

上野 真鈴



結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
ひだまり歌会	大阪市立総合学習センター	第2火曜、午後1時	0797(84)8881 桂 保子
短歌を楽しむ	コープカルチャー西神南	第1土曜、午後1時	
芦屋水襲短歌会	芦屋市民会館	第2土曜、第4金曜、午後1時半	0798(43)6820 加藤 直美
宝塚白珠の会	宝塚東公民館(宝塚市)	第3火曜、午後1時	072(794)0614 星野 敏江
心の花兵庫歌会	アステ6階 市民プラザ(川西市)	奇数月第1土曜、午後2時	072(794)3083 足立 晶子
明石大門歌会	明石市立勤労福祉会館	第1土曜、午後1時	078(927)4439 伊藤 敦子
明石短歌会	明石公園会議室	第1金曜、第3火曜	078(912)2673 田岡 弘子

益永典子先生を偲んで
益永典子さん



平成23年 兵庫県歌人クラブ
平成30年7月10日逝去
享年69歳
前田夕暮や石川啄木他の評
論も数多く、真摯に短歌に真
向う姿勢を感じさせられた。

略歴
昭和24年 西宮市生まれ
昭和44年 「好日」入社
昭和54年 『花底無韻』出版
昭和59年 『花つぶて』出版
昭和62年 「好日」編集委員
平成10年 『銀壺』出版

生後5ヶ月目のご病氣によ
り体質虚弱となったことをさ
らりと語られたことがあった
最晩年の病床の歌もご自分を
冷静、客観的に詠っておられ
る。諦念もしくは達観された
故の強さがありだったと思
う。又、繊細且つ豊かな感性
や独特のユーモア感覚の持ち
主でもあった。
歌会では、おつしやる言葉
がすくと胸に落ち、歌にた
ちまち血が通う実感があつた。
「明日が続くかぎりふんばっ
て生きていかねばならない。
私は言葉のもつ力を可能性を
信じている。」とあつた。まこ
とに師は言葉のもつ力を信じ
「短歌」と二人三脚でふんばり
生き抜き、立派に人生を全う
された。深い感謝と共に、心
よりご冥福をお祈り申しあげ
ます。
好日同人 内田恒子 合掌

追悼

声大きくて繊細なひと
來田康男さん



去る八月五日、兵庫歌人ク
ラブ幹事の來田康男さんが亡
くなられた。享年五十四歳。糖
尿病による合併症という。あ
る時期からすべての人との連
絡を一切絶つていた。彼なりに
相当な思いや覚悟があつた

のだらうと想像すると今でも
胸が痛む。「心の花」兵庫歌会
の他、歌人クラブでも共に活
動していた時期がある。私が
制作し彼が引き継いでくれた
ホームページの更新の他、会
報や年刊歌集の編集など、い
つも精力的に実務をこなして
いた。声の大きな人で私との
会話は周囲によくうるさがる
れた。
・ある朝に起きると体表と体
内がひっくり返つておたら
どうしよう
・しかじかの場合は保険金払
はずと証書の裏に蚤の文字

有り
・「ワシが居なくなればどう
する」と言ふ上司に心で答
へる「皆が喜ぶ」
ストレート、時に過剰なま
での挑発、とめどなく渦巻く
皮肉。それなのに実際に会
う彼はめっぽう物腰が低く
気遣いのできる繊細な男であ
つた。通夜も告別式もなにも
無く香典も辞退、彼を知る者
が集まる場はここが最初で最
後との思いから、九月の「心
の花」兵庫歌会の冒頭、全員
で黙祷をした。
武富純一 合掌

新入会員の紹介

平成29年	11月	上田 知子 (高砂市)	6月	福田とみ子 (姫路市)
4月		大鐘 稔彦 (南あわじ市)		馬場 久雄 (姫路市)
		前谷 節子 (南あわじ市)		西久保光子 (洲本市)
	12月	吉田ちず子 (三木市)	8月	川端美智子 (洲本市)
		加藤美智子 (姫路市)		勝代 絹子 (宍粟市)
		大島美代子 (淡路市)		高山 葉月 (尼崎市)
	平成30年			藤田 郁子 (神戸市)
	1月	中西 健治 (篠山市)		木下加代子 (尼崎市)
		城戸崎 貢 (三田市)		佐野さとみ (高砂市)
	5月	大木津多代 (淡路市)		加藤 容子 (三田市)
		中尾 俊子 (篠山市)		須鐘 英範 (姫路市)
6月		衣笠 紀子 (佐用郡)		許斐 妙 (神戸市)
		大塚 照美 (明石市)	11月	山村 幸子 (たつの市)
10月		粟屋喜代美 (加西市)		

結社(グループ)	会 場	内 容	問い合わせ先
水 甕 明 石 支 社	コープ朝霧店会議室	第1土曜、午後2時	078(991)0155 池本 俊六
東 浦 短 歌 会	東浦老人福祉センター(淡路市)	第2木曜、午後1時半	0799(74)2141 片山 田佳子
千 鳥 短 歌 会	松帆活性化センター(南あわじ市)	第1土曜、午後1時半	0799(42)2062 山田 恵子

平成二十九年年度

兵庫短歌賞応募作品評

はじめに

安藤 直彦

本年度の応募総数は四十一編、二十代から九十代後半まで、各世代に渡って活
達な意欲的な作品のご応募をいただいた。「兵庫短歌賞」「新人賞」「奨励賞」受賞
者作品については六月の「会報」に掲載済み、ここでは惜しくも賞に漏れた作品
を紹介し、選考委員の各評を参考にされ、次回に期して頂きたく願う次第。よき
作品は生を強むるという、お互いにそうした作品を共有し合いながらさらに存在
意義大きい超結社の兵庫県歌人クラブでありたく思う。

生活記録を越えて

小谷 博泰

「道すがら」

藤本 太子

・畝を掘りアスパラガスの白き芽を喰ひたる猪は柵も倒せり

・秋霖に烟る山路の拓けたるそこは一面 秋桜畑

農村の日常的な風景を詠みながら、イメージの豊かさを感じるの、回想によ
つて心象を捉えているためであろうか。写実的な描写法ではあるが、臨場感ほそ
こを越えている。たんなる現実写生の歌と読まれると、少し難解に思われてしま
うかもしれない。生活詠のように見えて、実は読者を選ぶ作品であろう。

「白く薔薇」

辻本 和美

・墓碑銘が判読不能の古き墓に忘れもののような白いバラソル
・『金閣寺』の燃えるページに挟まれた誰の朧か書評の切抜き

日常生活の中から即興的に作品の場面をすくい上げていくようでありながら、
その奥に随所に深い思索的な情景把握の力が感じられる。そうした作品において
は、読者は文学的知的な感性を要求されるであろう。一首ごとの背景に、現代の
物語的な創造があるのかも知れない。それぞれに味わいが濃い。

「雪」

木南 英子

・繰り返し上上がりくる遠景に少女佇む少女のままに
・雪さらにまた降り続く予報あり長き車列のつづく国道

時間の流れを形而上学的な感性において捉えているかのようである。日常のな
げない情景を描いているかのようでいて、過去、現在、未来の時間の重層的な
重なりと、存在のあやうさを感じさせる。深い思索に、繊細な感性が伴っている
からであろう。ころろよい難解さを感じさせる作品もある。

「風の行方」

上條とみ子

・ふるさとを聞かれて答ふ 軒先に竜の落し子吊してあたと

・ヤモリ来ぬ冬の厨のガラス窓物語なく灯を映すのみ

太古へ近未来へと時間の流れを鋭く追究する。一首ごとに作品の捉える空間も
事物も、哲学的な認識を求めるかのようで、抽象的な物象の把握に、読者はここ
ろよい幻惑を覚えるかもしれないし、知的感性が試されるかもしれない、安易な
日常詠を読むように読んでいると、作品から取り残されるであろう。

さらなる作品化への意思を

安藤 直彦

「舟」

藤本美智子

・墓原をとほりすぎゆく雲いくつ言の葉はみな風に吹かれて
・仄しき空のひかりを映したる草のみどりによりゆくこころ
水にたゆたう小舟になぞらえ、淡やかな「生」と「死」をみつめる一連、風体
の好みはあるが、わたしには好ましく思われた。課題はややもすると受身的に
なりがちな体と、「たゆたふ」「海のかなた」「風さそふ」「艶やかな」「そこはかと
なく」といった常套表現をどうするか、であろうか。

「想いのままを…孤独の中で」
・あすの日を歩むも語るもわれ一人亡妻に問いかけ晩年寂し
・亡き妻と歩みし道を辿り来て夕べ小川の岸に佇む
妻に先立たれた「独居」男の生きの「寂しさ」の一連。この一首目はそれを直
叙し、二首目は自己を客体化した詠風となつて余情を生んでいる。作品としては
やはり「晩年寂し」とことわらない方がいいだろう。上句に繋がる何か具体をも
つて、立体化できないものだろうか。

「古稀の祝い」

嶋澤 隆

・鎌を手に父と並びて稲穂刈る一息ついて仰ぐ雁行
・八階の窓から眺む大橋は真珠を装い古稀を寿ぐ
古稀となった身の、過ぎ越しを想い、今あることを寿がんとする力強い骨格の
歌、願わくば一首目は上句、下句の「刈る」「仰ぐ」の動きの時間の間を一所に
焦点化できないか。二首目「眺む」は終止形でここで切れる、すると一首の調べ
がぎくしゃくする。こうしたことを乗り越えようと更に作品力が増すことを思う。

「灌ぐ手袋」
・客観をかたちせむと苦しめば布引の灌ぬのを曝して
・手袋は運命のやうにおちてをりローラースケート得意だらうか
「客観をかたちせむ」は作者の作歌姿勢でもあろう。なかなか。日常の具体
を「超感覚」によつて普遍に抽象化する。その飛翔のさせ方が課題か。二首目の
「運命のやうに」と「得意だらうか」の関係意図がよく分からない。へあ、てふ
聲のはなたるあたらしきみづの膨らむ湯舟に入れば、などいいと思う。

「古稀の祝い」

塩見 俊郎

・客観をかたちせむと苦しめば布引の灌ぬのを曝して
・手袋は運命のやうにおちてをりローラースケート得意だらうか
「客観をかたちせむ」は作者の作歌姿勢でもあろう。なかなか。日常の具体
を「超感覚」によつて普遍に抽象化する。その飛翔のさせ方が課題か。二首目の
「運命のやうに」と「得意だらうか」の関係意図がよく分からない。へあ、てふ
聲のはなたるあたらしきみづの膨らむ湯舟に入れば、などいいと思う。

長尾 宏

降参せずに推敲に推敲を

藤岡 成子

「言葉よ、これから貴様は俺の手下だ。」

山田 麦

・問い掛けは雨粒の数 この先を生きて俺は独身で死ぬ
・吸って吐く呼吸の隙間に鳥が飛ぶ 途切れる命を繋げるように
・作者名が判り、女性の作品と知り驚いた。伝統的な短歌形式にとられず、自由奔放に詠んでいて、今風のおもしろさがあり魅力的だ。言いたいことを率直に歌にしているが、感情が前面に出すぎた感がある。

「生検」

石飛 俊郎

・新年も無にしてしまつた生検ぞでもういいよ山茶花が赤い
・他人には見せることない便の色せいせい堂々のぞく看護師
大腸ガンの生検を受け、切除するまでの、曰く言い難しの気持が読みとれ魅かれたが、同じトーン、内容でまとめているところがおいしい。自然詠、社会詠等を入れるともっと良くなる。辞書で細部まで確かめる習慣を。

「曼珠沙華」

長谷川恵津子

・うつろなる心で摘みし曼珠沙華ききのう蕾が今朝は火花に
・ナツメロの合唱漏れくる集会所色とりどりの杖の杖の並びで
二首とも、下の句の目のつけどころ、具体が効いている。しつとりとした大人の二連に仕上がっているが、少し無難に納めすぎたか。今の自分をはみ出し、挑戦、冒険した歌を加えてほしい。読者はそこで立ち止まる。

「モザイク模様」

船引 貴明

・しもやけとおつきあいする寒さです耳朶かゆい夜にかゆくて
・コーヒー滓捨てられてなおに立つ裏畑の隅風はなくとも
一連、日常生活を細かく丁寧なすくいと、平易に詠まれていて、作者の姿が見える。特に二首目、物(コーヒー滓)を詠んでいい。事柄を詠まずに、物を詠んだ歌を増やせば、他の作品が光ってくる。

定型を意識すると歌の姿も内容もひきしまる 尾崎 まゆみ

「転落記」

上村 武男

・サスペンスのドラマのように階段を転落床に強打流血
・CT画像指差し告げる硬膜下血腫と美人の医師の指を見ている
階段から転げ落ち、それが原因ではじまる「サスペンスドラマ」の犯人は硬膜下血腫。困難な状況を辛口の言葉で畳みかけるように、臨場感溢れる一連となっている。字余りの歌が多いのが惜しまれる。

「セビアな時代」

西村 徹

・平成と昭和をそれぞれ三十年生きし私の思考はオセロ
・定年の軟着陸をするために吾の車輪とは何なのか問う
昭和から平成へさらに次の元号へという過渡期に焦点をあてた一連。懐かしい昭和の物を随所にちりばめているのは評価できる。定型詩ではなく散文に見える歌が散見される。定型を意識すると内容も引き締まる。

「イヌサンローラン」

山縣 栄祐

・朝番犬白昼番犬夜番犬残業代はミルク一杯
・新春に犬と歩けば黄緑のへわかばが映える自販機の中
犬への愛あふれる一連。パンチも効いている。ただ犬の立場に徹するか飼い主に徹するかを決めていたらもっと引き締まった一連になったはず。自販機の歌のように完成度の高い歌は詠み応えがある。

「挿絵のよつぱ」

知地 一代

・ねむりたい羊かぞえて柵こえてふと目覚めればアルプスの丘
・買い替える冷凍庫の奥「なんだろう」化石のような知らない過去が
普段の生活のふとした瞬間のひらめきを一首にする感性の良さが光る。羊を数えてアルプスの丘を夢に見る。冷凍された何かは、過去の化石。おもわず共感してしまう。構成を再考すると、ぐっと良くなるはず。

こつぱの正確さ

中川 昭

「米の旅―上総へ」

尾崎 順子

・護摩を焚く火の静けさや今生の境に座り父は読経す
・山陰線乗り場は駅の隅にあり「きのさき十号」ひっそりと発つ
「米」とは八十八歳のこと。米寿の祝いに作者は父と共に旅に出た。老いた父の記憶を辿る旅だが、伯父や祖父など人物の絡みが複雑すぎた。「今生の境」とは張り詰め感があって良い。二首目は父を見送った歌？細やかな設定を望む。

「漂ぶ人魚」

高山 葉月

・遡上する魚のやうに時間軸さかのぼりゆく亜爾然丁へ
・デモ隊が大統領府を目指すなか太鼓をたたく怒りのリズム
タンゴに魅せられてアルゼンチンへ渡る己れを「遡上する魚」に喩えた一連、美しい韻律に踊る。二首目の結句もどこかタンゴのリズムを連想させてデモ隊のエネルギーを象徴するかのようだ。旧仮名、用語の誤りが気になる。

「憧憬」

岸本万由美

・悩みごと何もなければ枕につく細き毛髪われの全景
・つきつめて物は思わじ病室にて展開図に添い紙を折りゆく
力のこもった一連にありありと出色のひとりを見た。一本の細い毛髪にしか過

ぎない、しかしそれがすべてだという煩惱は深い。二首目の絶望感も然り、「添い」は「沿い」の誤り。しかし、この作者の歌の力量は信じていいものだ。

「生活」

白井てる子

・年明けて上り下りの坂の道車は走る曙光をあびて
・山裾の空家に人の住むと言ふまだ見ぬままに年を越えたり
「上り下り」に作者の視線が動いて面白い。新しい年が明けて、朝日を浴びながら人はまた生活のために働くのだ。そこに作者の無言の応援歌がある。二首目も隣人愛ゆえに気になる心情を歌って素適な一首に仕上がった。

語彙を豊かに、そして的確な香り立つ表現を 桂 保子

奥田 光子

「ある口ある時」

・脳骨腫余命十年がなんとまあ四十余年をわれは在り経し
・ドナーカード二十年間持ちつづく 消費期限はないのでせうか
この二首は自己に引き付けてうたつていて、特に二首目のドナーカードと消費期限の取り合わせは鋭く妙。ただ、一連の素材が世界の政治、亡き夫、馬酔木、イチロー、自分の老い…と実に広範囲。テーマを絞ってもよかつたか。

「起き上りこぼし」
・列島の災害多しをどないする起き上りこぼし「もう堪忍や」
・瀬戸内の凧なる海をふるさとに貫つてゆきたい隠岐西ノ島
一首目の口語関西弁には実感があり魅力歌だ。諧謔のセンスに特色のある作者だが、時にその度合いが濃過ぎる場合も。破調や三句五句共に体言のうたもあり調べも気になったが、掲出歌の二首目のやわらかな詩情には見惚れる。

小畑 恵子

「夢見た先に」
・わが町もふたりも今年五十年センタービル跡つち音高し
・連絡のなき二週間三人と地球儀回しブラジルさがす
一連は作者の住む明舞団地の五十年経過に触発されてこの団地と作者に流れた歳月を交錯させた。このスタンスと哀感賛成。しかし、やや散文や説明に傾いたか。ルポルタージュ手法であつても前の歌に倚りかからない一首独立感とキラリ光る独自表現があればさらに印象深い一連になつたか。

森嶋 郁子

「神のふるひれ」
・生きすぎをかなしみてこしにいま神の振る青きひれみえてくるなり
・生き死にのことはいつしか遠のきて春潮をよぶ海をみてをり
人生への爽やかな達観が一連に滲んでいて魅力。「神の振る青きひれ」の発想もユニークで賛成。ただし表記にも配慮を。題は「神の振る領巾」がお勧め。

三好美奈子

目の前の現実をつぶさに見よ

小林 幹也

「なにげない時間とびぎりの時間」

遠藤 和子

・アナベルの花の白きにころも乗せ窓辺に寄りてコーヒーを飲む
・朝まだき水車の音に目覚むれば霧の流るる母の故郷
・遠藤さんは去年「動物ビスケ」にて奨励賞受賞。今回は「なにげない時間とびぎりの時間」の題名通り、気だるいような、退屈な時間の流れを描きながら、それを素晴らしい瞬間として捉え直している。去年以上の力作と、私は思う。

「まぶしき一冬」

矢野 一代

・顔半分マスクに伏せて黙秘する被告のごとくまぶしき一冬
・甘柿のつぶら実おもる昼下がり喪中葉書はポストに眠る
わびしいような詩情があつた。現在の社会をしっかりと見定めておこうという姿勢が見られた。目の前の現実をつぶさに見て、逃げずにしっかりと取り組もうという姿勢である。この姿勢を忘れずに邁進してほしい。

「女神テミス」

福島 妙子

・石だたみ外人墓地へあなひせる螺旋展望台にはばたく女神
・ひとつとところへ眠る回教ユダヤ教ソアスター教 六甲の森に
作者独自の見方がしっかり出ていて、ひとつの世界を形づくっている。その一方で、連作のなかで、他の歌をいかすために、説明に終わり、一首としてみたとき弱い歌があつたのが惜しまれた。地歌とは何かを今一度考えてほしい。

「白良浜」

中山 敬子

・丘一面みかんの木々の有田過ぎ / みなべの梅の咲く日近づく
・瓦屋根どつしり古き町並は / 湯浅醬油の醗酵かおる
「白良浜」という題名にある通り、一連の中で、白良浜への旅行を詠んだ歌がよかつた。ただ歌の表記に問題がある。上句で改行し、次の行に下句を書くかち書きになっている。歌は本来、一行で書くものと覚えておいてほしい。

具体と発見を大切に

三津野 幸代

「和声つくらむ」

大村 博子

・気に入りの肌触りよきこのシャツに疵の残せし繕ひのあり
今は亡き母上への感謝の念と今迄気付かなかつた思いやり、残念の意が汲み取れる一首。発見の具体が効いている。たいせつに愛用してほしい。「残せし」は「残し」。
・めらめらと燃ゆる嫉妬の深層を冷やす心のマグマ溜りよ
結句のマグマ溜りが不安と危機感を煽る。噴火すれば自爆必定。一卷の終わりである。ジェラシーを自ら抑制する冷静さをも持つ作者。初句は常凡。工夫要。

「面影」

大西 弘子

・病む人と幾度いこし病院の木の下の陰のベンチはあらず
初句はもう一步踏み込んで「病む夫」とし結句の非情さ、切なさを際立たせたい。二人で憩いの一時を過ごしたベンチが無いことで短歌的抒情が深まった。

・なつかしき人に逢いたし五百羅漢しぐれにぬれて面影さがす
読者をぐっと引き付ける二句切れが効いている。雨をも厭わず亡き人の面影を五百羅漢の中に探し求める作者の一途さがひしひしと読者に伝わってくる。

「千年を経て―建礼門院右京大夫集へ―」
伊藤 敦子
・資盛をおもひて詠みし三百首夜の枕の燈に重おもし
平資盛に愛された右京大夫が彼の戦死後、切々たる想いを詠んだ歌集に心寄せる作者。大夫にも負けない作者の秘めた情熱をも窺える重厚な下句に魅かれた。

・千年を隔つる女人の息づきはげしくわれの安易を咎む
右京大夫の哀切な真情を吐露した一集に、心酔の作者だからこそ千年前の大夫の喝の息衝きを感じるのだ。問題意識無き日々を顧りみての自省の結句に同感。

「懐かしむ」

木下加代子

・大空を埋めています星群れのひとつは夫の光と仰ぐ
空いっぱい星群。中でも一際光の輝く星に亡き夫君を重ねしみじみと仰ぐ作者。発想は類型があるが下句の言い切り、断定で成功。

・夢にきて背を向け顔を見せぬ母 紺の着物の縞を残して
夢の中で顔を見せぬ母の背ばかり見詰めていたからこそ醒めても着物の色、柄が浮かんでくる。残念の思いが下句に凝縮されている。三つの「を」は推敲要。

発想の飛躍を

吉野 節子

「落葉の季節」

福山 裕恵

・蒼天に枝さしかわし冬日撒く公孫樹老樹の裸形まぶしむ
・「役行者」エンノギヨウジャとスマホ練るこえ呑みゆけり大滝の淵
一連は的確で抑制の効いた表現、クラシックな詠風。口語短歌全盛の現代では貴重、魅力的である。とはいえ落葉によせて想いを述べるのは類想が多く、個性を出すのは容易ではない。二首目のように落葉から離れ、自由な発想の歌をもつと入れて、構成に強弱と変化を。次回作が切に待たれる。

「法灯」

西村 節子

・絵の釈迦に見呆けてをれば胸痛のいつしか失せてゐるではないか
・佛飯のうまく台座に乗らざれば粗相あやまる善導大師に
彼岸会を中心にまとめた一連。こういう歌にありがちな説教調にならなかつたところに好感をもつ。一首目「ゐるではないか」とぼけた言い方にユーモアがあ

る。ユーモアは心の余裕。二首目、親しげに善導大師を詠つても嫌味がない。がこれ以上になると俗。練達の作者、さらさら読み流す傾向がある。

「折りにふれ」

中井今日子

・歌会の詠み手と読み手のあわいにはまるい空気の漂いており
・極楽の余り風そよと吹きてくる耳に優しき亡き母の声
歌会での作者と読者の心の世界を「まるい空気」と捉えた感性の柔らかさ。二首目は「極楽の余り風」という慣用語を活かしたしらべの良い母恋いの歌。

「不信(ごんじ)」

宮崎 浩

・偽札を財布にいれたそれだけで「悪人」となる聖書(聖書)読めば
・この世界やみのなかにもひかりありヨハネ一章きみと読む夜
生真面目に生きるゆえの苦悩の二十首。歌が心の支えであろう。言葉を彫琢する習練を重ねるうち思考は深まる。二首目、信仰に支えられた相聞の佳品。

2018年度第2回幹事会報告

10月30日、三宮勤労会館

司会 加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課主幹 中井孝浩

◇ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会

選考委員会出席者(県・加西市)

*県 (公財) 兵庫県芸術文化協会業務執行理事 大谷武徳
兵庫県芸術文化協会事業第1課 尾崎聖美

*加西市

加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課長 高見昭紀
加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課主幹 中井孝浩
加西市ふるさと創造部文化・観光・スポーツ課 村岡安岐子
松岡龍太

*兵庫県歌人クラブ幹事27名、幹事外事務局員2名

・2018年度ふれあいの祭典兵庫短歌祭作品審査

一般部門 応募総数440首 審査司会 新屋修一

ジュニア部門 36校(中学校25校、高等学校11校)、

応募総数578首 審査司会 安藤直彦

あらかじめ選者の方々により選出されたものを、それぞれの賞にふさわしい歌かどうか1首ずつ検討。県、加西市の委員の意見、出席者の挙手により決定。

◇幹事会

・兵庫短歌祭 12月8日(土) 13:00~16:30

加西市健康福祉会館ホール

今年は県政150周年の記念の年。加西市と歌人クラブが力を合わせ、盛大な会にしたい。

実施要領検討

(進行次第) オープニング・主催者挨拶・表彰式・作品総評

・シンポジウム「短歌・俳句・現代詩のあいだ」

(パネラー) 高橋睦郎・小川軽舟・山下泉・(コーディネーター) 林和清

地区通信

〔阪神〕 10月7日、フランス・リヨン市より一時帰国の松本美穂氏(心の花)を迎え、大阪市天王寺区の田中教子氏宅にて、ナツノキ超結社歌会を開催。出席者足立晶子・田中教子・近藤雄三・吉野節子他6名。▼11月11日、尼崎市総合文化センターにて「第73回尼崎市文芸祭大会を開催。表彰式と作品研究会。選者江戸雪・前田康子・中野昭子・鬼田孝子・吉村彰子各氏。

(吉野節子・加藤直美)
〔神戸〕 5月27日、海市短歌会は姫路書写山へ吟行。参加者中川昭氏他10名。▼7月12日、サンプラザ西館にてこうべ芸術文化会議文芸部会開催。安藤直彦・黒崎由起子両氏出席。▼10月29日、花鏡短歌会は須磨海浜水族園に吟行。午前中各自取材、午後シーパル須磨ホテルコスモスの間にて歌会、参加者石橋妙子氏他30名。▼10月30日、文学圏は須磨寺、須磨離宮公園及び周辺へ吟行。参加者19名。

(黒崎由起子)
〔明石〕 5月21日、明石市柿本神社にて「第160回春季献詠祭」を開催。選者楠田立身氏。兼題「桜」、競点題「光」。

出詠・祭典参列者三宅隆子・石飛俊郎・伊藤敦子各氏他30名。▼5月27日、ホテルキャッスルプラザにて二〇一八年度六甲短歌大会開催。総会・歌会・懇親会。互選一位石飛俊郎氏《こゑあらばいかに鳴き交ふ紋白の番がもつれ揺るる白光》。田岡弘子・石原智秋・牧野秀子各氏他40名が出席。▼6月23日、明石ペンクラブ平成30年度総会開催。作品発表誌「新明石大門(代表野瀬昭二)」第2号発行。▼7月、明石短歌会(主宰田岡弘子)は作品集「ともしび」第34号を発行。▼9月22日、明石ペンクラブ例会にて池本俊六・伊藤敦子両氏が「新明石大門」第2号掲載の短歌合評を担当。▼「明石ペンクラブ通信」第14号・第15号・第16号を発行。

(伊藤敦子)
〔姫路〕 6月9日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ短歌大会開催。講演、詩人の高橋順子氏。演題「詩と小説の間・夫、車谷長吉とともに」。司会、新屋修一氏。応募238首。作品評、小畑庸子・神保原廣己・浮田伸子・飯田進各氏。参加者は楠田立身・濱守・小松カヅ子・内海永子・青田綾子・西村久代各氏他80名。大会終了後、講師高橋順子氏を囲み懇親会。

(飯田進)

〔東播〕 6月9日、茅花短歌会は、小野市短歌フォーラムツワに全員で参加。▼7月11日、茅花短歌会は「茅花」第188号を発行。▼7月11日、25日、稲美町ふれあい交流館のサークル発表会に短歌会全員の短冊を展示。▼9月13日、前田昭子氏、いなみ野学園高齢者放送大学の15年賛辞を受賞。▼10月10日、「茅花」第189号を発行。▼10月30日、恒例の天満小学校六年生の短歌指導に茅花短歌会より前田昭子氏他5名が参加。

(前田昭子)
〔中播〕 5月30日、京王プラザホテル(東京)にて開催された「水鏡全国大会in東京」に姫路支社より、小畑庸子・生田よしえ・小松カヅ子・楊井佳代子各氏他5名出席。▼8月4日、福崎町文化センターにて山桃忌奉賛第33回短歌祭を開催。応募数319首。選歌者楠田立身氏(象)。議会議長賞塩澤文字子氏。武内栄子・吉田千代美・岸本寿代各氏他が入賞。▼10月15日、千里市民会館にて千里短歌会四十周年記念短歌会開催。小畑庸子氏(水鏡)が講話と選評を担当。

(生田よしえ)
〔北播〕 6月9日、小野市うるおい交流館エクラにて第10回小野市詩歌文学賞・第29回上

田三四二記念小野市短歌フォーラム開催。詩歌文学賞受賞川野里子氏「硝子の島」(短歌部門)。短歌フォーラム応募数一般の部1,203首。学生の部6,832首。入選者一般の部最優秀一席林暁子氏(岐阜県岐阜市) 学生の部最優秀藤本凛さん(小野市立市場小3年)他2名。出席者小野市長蓬菜務他。選者馬場あき子・永田和宏・宇多喜代子各氏。▼9月15日、コミセンおのにて小野市文芸大会開催。応募数54首。市長賞藤本勝子氏(西脇市)。出席者小野市教育委員会教育管理部長橋本浩明氏他。

(芝本政宣)
〔西播〕 9月23日、宍粟市市民短歌会開催。講師として尼子勝義氏が参加。▼10月3日、西播磨短歌祭部会開催。尼子勝義・内海永子・飯田進・小松カヅ子・岡本光代各氏参加。30年度西播磨短歌祭の選歌、運営について協議。▼10月6日、赤穂市民文化祭短歌会開催。▼10月28日、西播磨ふるさと文化芸術振興事業西播磨短歌祭開催。出詠数は、一般201首、学生921首。選歌にあたった5名が歌評を行う。▼11月2日、佐用町庁舎会議室にて平成30年度文学祭秋季短歌大会開催。佐用町長賞花山初代氏《嫁ぐ吾に母の

仕立てし緋の着物嫁のままにして老いにけり》。佐用町長・議会議長・教育長・文芸協会長・安藤直彦・新家イサ子各氏他23名出席。

(尼子勝義・安藤直彦)
〔但馬〕 11月11日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「じろはつたんの里」歌会。▼11月13日、休暇村竹野海岸にて但丹歌人会「秋の大会」。講師中島眞喜子氏「古川吉雄氏の人と作品」。▼11月17日、豊岡市但馬文教育府にて「但馬文学のつどい」。短歌・俳句・冠句・川柳の合同作品発表と研鑽交流。▼11月21日、新温泉町、浜坂高校にて佐佐木幸綱氏講演。

(足立勝蔵)
〔淡路〕 7月「第37回全淡短歌祭」開催(於洲本市立図書館)。投稿数一般の部60首ジュニアの部31首。淡路文化協会長賞山田恵子氏《君の声を欲しい夕暮れありまして猫をぎゅうんと抱いたりします》、中川昭選賞一席島田英樹氏、淡路教育事務所長賞村上綾理氏、淡路歌人クラブ賞・互選賞一席西久保光子氏。「海市」代表中川昭氏の講演、推敲の大切さを拝聴。明解で深く論ずる中身に目から鱗の充実したひと時を過ごす。

(島田英樹)

平成30年度 兵庫県歌人クラブ 「兵庫短歌賞」「新人賞」作品募集要項

資格 兵庫県歌人クラブ会員及び県下在住・在勤・在学者・他関係者
作品式 未発表短歌20首
1. 作品はA4判400字詰め原稿用紙2枚に浄書、右肩を綴じる
2. 1枚目の欄外に作品表題と新旧仮名遣い別を記入する
3. 作品表題・氏名・生年月日・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記入した表紙をつける
4. 封筒の表に「兵庫短歌賞応募作品」と朱書きする

応募料 2,000円(作品に同封、切手不可)
締切 平成31年2月15日(消印有効)
宛先 〒676-0824 高砂市阿弥陀町南池526-22 鈴木裕子方

兵庫県歌人クラブ「兵庫短歌賞」係
選考 兵庫県歌人クラブ兵庫短歌賞選考委員会
発表 会報第201号紙上
表彰 平成31年4月29日 兵庫県歌人クラブ総会・神戸短歌祭会場 県民会館11Fパレテホール

※「兵庫短歌賞」は、その中に「兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞」を設け、年度応募作品を選考委員会が審査(「該当作無し」の場合もある)しております。「兵庫短歌賞」に向け、既に「新人賞」「奨励賞」受賞者も奮ってご応募下さい。

(問合せ先) 679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦
TEL0790(85)0021 090-3650-2998

受贈歌集・歌書(兵庫真関係分)

☆『ともしび』 明石短歌会作品集34

7月 平林千鶴子
あの子からメール届いていないかと
携帯のぞくお彼岸の朝

☆『歌と川柳』 竹村晴子

8月 北羊館
野牡丹のはらり零れる紫に母の脱ぎ
たる着物が重なる

☆『軌跡』吉岡生夫短歌論集』

10月 吉岡生夫

☆『金の環』

ブイーンソリユーション

10月 加藤直美
香りつつひと夜に散りし木犀の金の
環めぐらせ人を拒みぬ

☆『給水塔』第四十四輯

11月 東浦短歌会
右ひだり非対称なる吾の面の百面相
に剃刀あてて

受贈歌誌・歌書・会報

平成三十年五月〜三十年十一月分

「白珠」月刊 編集発行 安田純生

「白圭」隔月刊 編集発行 内海永子

「とべら」月刊 代表 尼子勝義

「山の辺」月刊 発行 高 蘭子

「花鏡」季刊 代表 石橋妙子

「鮎」月刊 編集人 島崎榮一

「コスモス姫路」 コスモス姫路支部 編集発行 前田昭子

「茅花」季刊 編集発行 楠田立身

「象」季刊 編集発行 中川 昭

「海市」季刊 編集発行 山根晴正

「夢」月刊 編集代表 保田ひで

「波濤神戸」 編集 下村千里・浮田伸子

「文學園」月刊 代表 田岡弘子

「六甲」月刊 代表 棚橋好江

「幻桃」隔月刊 幻桃短歌会 平井恭治・長谷川正

「薫風」月刊 代表 兎田孝子

「津布良」季刊 代表 角倉羊子

「旅笛」季刊 編集発行 井上美地

「綱手」月刊 発行 尾形 貢

「但丹歌人」隔月刊 代表 小畑庸子

「ひめぢ水甕」隔月刊 主宰 竹村公作

「礫」隔月刊 代表 兼貞靖行

「丹生」隔月刊 代表 芦屋水甕短歌会

「五月風」藤井幸子 足立勝歳

「鳶が城便り」月刊 足立勝歳

「すばる」 代表 すばる川柳会

「石川県歌人」 代表 石川県歌人協会

「詩と連句 おたくさ」 代表 鈴木 漠

「時の川柳」月刊 時の川柳社

「姫路風羅堂俳句大会」作品集

「西播俳人協会」 代表 重流里・中村武猛虎

「印南野文華」 代表 印南野半どんの会

「短歌」ながの 代表 長野県歌人連盟

「どるふいん」 代表 長野県歌人連盟

『年刊歌集58の訂正』

2018年11月刊行

・27頁2首目 石田勝啓氏の歌

(誤) 岸壁に ↓(正) 岩壁に

・262頁10行目 歌壇史年表

(誤) 小谷博康 ↓(正) 小谷博泰

校正の不手際があり、誠に申し

訳ございません。訂正してお詫び

いたします。年刊歌集編集委員会

「姫路文学」132

砂原唯男

「短歌 ながの」

長野県歌人連盟

「石川県歌人」40号

陶山弘一

「青磁社通信」

青磁社 永田 淳

「文芸塔」冠句研究 月刊

松尾明美

第63回全国川柳作家年鑑

ふあうすと川柳社 赤井二郎

「年刊歌集」

京都歌人協会

「埼玉歌人」御供平信・大阪歌人ク

ラブ」上田 明・京都 歌人協会会

報・「短歌 堺」堺歌人クラブ・「長

野県歌人連盟会報」松田康美・「会報

西宮歌人協会・「和歌山県歌人クラブ

会報」水本 光・「大分県歌人クラブ」

伊勢方信・「会報」姫路歌人クラブ

濱 守・「風」日本歌人クラブ 三枝

昂之・「兵庫県現代詩協会 会報」た

かとう匡子

◆余滴◆

皆さまが大切に育ててくださった会報は、記念すべき200号となりました。ありがとうございます。

藤本朋世 山田 文 森嶋郁子